



17 対談は、ミシガン大学日本研究センター主催の原一男作品上映会などのイベントの一環として行われた

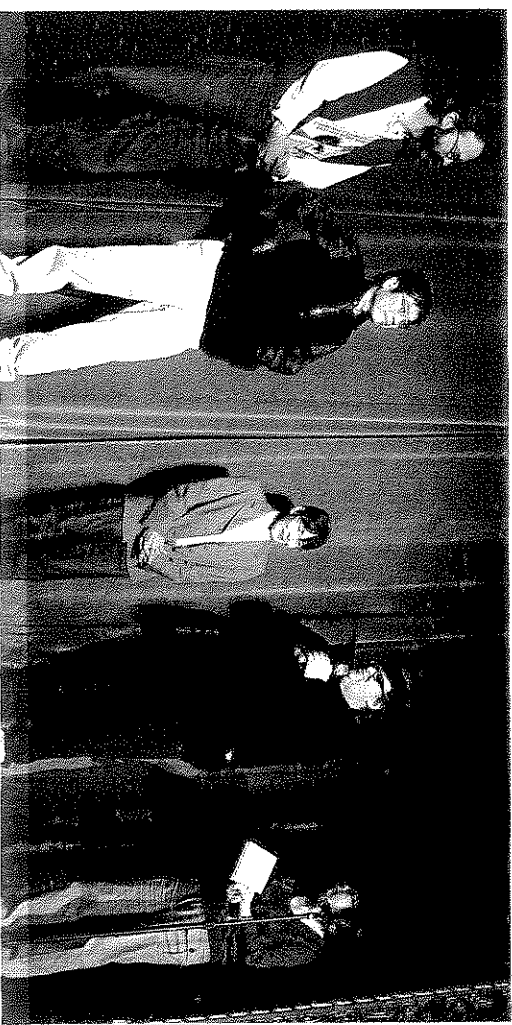
左へミジ上の写真でにややかな笑顔を浮かべているのは、真ん中があのマイケル・ムーア監督。「ボウリング・フォー・コロンバイン」「華氏911」と日本でもおなじみのドキュメント映画の鬼才である。その左は原一男監督。大ヒット作「ゆきゆきて、神軍」はあまりにも有名な。右側は原監督のハイトナ、小林佐智子さんである。

さてこの日米の鬼才監督が5月12日、アメリカで対談を行った。マイケル・ムーア監督はこの8月25日公開の最新作「シッコ」で今度は医療問題に挑んでいるのだが、この2人互いに「クシヨンドキメタリ」とでも呼ぶべき手法でよく比較されるし、互いに高く評価しあっている仲でもある。

非常に興味深いその対談内容を、本誌は今回誌面で紹介することにした。2人のドキュメント手法のどこが似ていて、どこが違うのか、ぜひ本文をご覧ください(P 36)。



マイケル・ムーアと原一男 日米「鬼才監督」のドキュメント論



マイケル・ムーア

「ゆきゆきて、神軍」などのドキュメンタリー映画で知られる原一男監督と、「華氏911」に続いて新作「ミッコ」が公開されるマイケル・ムーア監督。鬼才と言われる日本の監督が、ドキュメンタリーについて議論を交わした。



原一男監督作品との最初の出会い

「まずムーア監督、原監督との出会いについて話して頂きますか。」
 ムーア あればちょうど「ロジャー&ミッコ」の制作中で、私はワシントンD.C.にある自分の編集室でマイケルの編集を見ていたんですが、その晩、クネイセントナ内の米国映画協会で「ゆきゆきて、神軍」の映画を観た。原監督の「ゆきゆきて、神軍」を受けたドキュメンタリー映画で最も影響を受けたドキュメンタリー映画に原監督の「ゆきゆきて、神軍」を運ぶなど高く評価しているという。今回の初対談は、同ゼンターの映画研究者である阿部テウク・ノエス教授の尽力により実現した。(編集部)

5月12日、アメリカ・ミシガン州にて、「極私的ドキュメンタリー」と銘打って、原一男監督とマイケル・ムーア監督の公開トークイベントが開催された(ミガン大学日本研究センター主催)。ムーア監督は「ここ10年で最も影響を受けたドキュメンタリー映画」

に原監督の「ゆきゆきて、神軍」を運ぶなど高く評価しているという。今回の初対談は、同ゼンターの映画研究者である阿部テウク・ノエス教授の尽力により実現した。(編集部)

(GM)の会長ロジャー・スミスをフロントに連れてきて、GMがフリントの街をいかに荒廃させてしまったかをその目で見てもらおうとしていたわけですが、やっていったのは本社を訪ねていたり、クリス・パリーに出席したりといふことで、比較的礼儀正しく振る舞っていたと思う。私も一応文明人ですから(笑)。

「ただ「ゆきゆきて」の中で原さんが追っている人物は、真実を得るために文字通り激しく降りかかってくる。その過程に原さんは加担しているわけです。」

「原さん自身も、あの映画で主人公に加担していたと思いますか。」
 原 主人公の奥崎三さんと私は、全く違う人間なんです。ただあの映画を見たら、監督である私と奥崎さんとは重ね合わせるように、どこか、皆さんも驚かされるように、私はとてもフレンドリーな人間なので(笑)。

日本人の観客の多くは、マイケル・ムーアさんと私が同じような手法でドキュメンタリーを撮っている、似ていると思っっているように。だけどマイケル・ムーアさんの映画では監督本人がいる

と行動していくでしょう。だから私にはあなたが奥崎さんのように見えるんですよ。

ムーア 原さんは、映画に登場する男を、興味を持って観察していると思うんです。映画の中で追っている人物が行動を起こすとき、原さんは当然そこには直接関与しないで、そこで何が起ころうと、ただ起こったことを撮影する道を選んだわけです。とはいえ、撮影中にちょっと怖くなって、仲裁に入る必要性を感じたこともあると思うんです。

原 何か日常的な視点では見えないもの

原一男 1945年生まれ。映画監督。「ゆきゆきて、神軍」「さよならCP」「全身小説家」のほか、初の劇映画「またの知華」などを手がける。マイケル・ムーア 1954年生まれ。映画監督。ミシガン州フリント出身。医療問題を扱った最新作の「シッコ」は8月25日より日本公開予定。



について触れると、私はもつと厳しい銃器所持取締法さえあれば、こんなにお互いに殺し合ったりしないで済むと思つていたんです。ところが、映画作りの一環でカナダに行つたのですが、カナダで一人あたり所持している銃の数はアメリカよりも多いのに、お互いを殺し合うことはしないんですよ。スイスでは常備軍がない代わりに世帯を持つ男性は全員家庭に銃を用意しようという法律があります。だけど彼らが学校に押し入つて銃を乱射するなんてことはしません。となると、なぜ私たちがだけがそういうことをするのはもともと私が考えていた間いではありません。いろいろと考えていく中で、カナダの人々に促されて生まれたものです。原一男ドキュメンタリーの面白いところは、私と奥崎さんと、それからもう一人奥崎さんが相對する奥崎さんとかつて同じ部隊だった元兵士の人、この三者の誰も手馴してなかったことが何かのことがきつかけてホーンと起きることですよね。神軍」の映画の中で2回、奥崎さんが暴力

がたくさんあるわけで、そのペールをはがしてかないといけない。ペールをはがすためにカメラという武器を使う。私は日本人ですから、日本人として見なければいけないものをとにかく見ようとしたのです。原さんが暴力的な人間だとはいふ思つていませんが、あの映画を見ただけで編集室に歩いて戻つたとき、私は普通のドキュメンタリーとは違つて分かっている「ロジャヤ&ミ」の制作に取り組んでいて、当時の「ドキュメンタリー警察」がこうしたプロチを書きないだらうことは予想してました。ちなみに「ドキュメンタリー警察」というのは、私たちが9歳か10歳くらいのおきから取りついて、「詩」というのは「こやつてつくるんだよ」「短編はこや」「こうして空は青く、木は緑に塗るんだよ」と言ってくるような「芸術」を無理矢理私たちの中に植え付けて、ある種の聖に押し込み、正しいやり方があるはずだと主張する人たちです。私は過去20年間そうした人たちと争わ

をふるうシーンがあります。2回とも奥崎さん自身暴力をふるうなんて、これつぼちも思つてなかつたんです。ただ何かの弾みでホーンと暴力をふるつてしまふ。すると、奥崎さんもびつくりする。私もびつくりする。隠られた方もびつくりする。そういうその関係者たちがある混池の中に引きずり込まれる瞬間を、カメラが描きだしていく。これがドキュメンタリーの面白いところだと思つています。——もし原さんがその場にいなければ、カメラがそこになければ、暴力は起こらなかつたんじゃないでしょうか。原その通りです。その通りなんですけれども、違う面があるんです。「神軍」の撮影中に奥崎さんが私に、「中隊長さん殺す場面をぜひ原さんに撮らせてください」と言ってます。こういう殺人の場面なんて世界のどのフィルム映画も滅多に遭遇できないチャンスだ。それを今、私はあなたにプレゼントするんだ、と。私はそのとき怖くて震えていました。しかも悪いことに、私はその時だけカメラを持つていなかった。その時の奥崎さん

なければならなかつたし、今でも彼らは私の映画の作り方について議論していて、これはドキュメンタリーじゃないとか、大まじめに話し合っているわけですが、それを聞く度に「一体誰がこれドキュメンタリーじゃない」なんて決めつける権利を持つているのかと思つます。一体いつまでこういうことが続くのか。私ももう50歳ですから、いい加減「これは正しい表現方法じゃありません」と言われ続けることに辟易しているわけですが、そこから逃れることはなかなかできない。

「神軍」が「ロジャヤ&ミ」の完成を「許可」

んの私に対する眼差しを見て、狂気が今まさにここにあると思つました。これを何とかフィルムで撮らなくちゃいけない、奥崎さんほどにかく、この場面でイエスカノ1か言つてくれと私に迫ります。イエスと言えは、すぐにあの人は殺してしまふ人です。ノ1と言つたら「ああ、原さんは分かつてない」と言つて、私は激しく怒られる。ここで何とか言い逃れできれば、もう一度奥崎さんは私に人を殺す場面を撮れと言うだろう。そうすれば奥崎さんの持つている狂気を、その時に撮影できるだろうと考えた。そこでまず正直に「奥崎さん、私、怖いです」と言つたわけですが、その後、「でも、何とか頑張つてみます」というような言葉を言わなくちゃいけないと思つながら、でも怖いと書いた途端に奥崎さんは、「ああ、原さんは駄目な人です。今まで撮影したフィルムを全部燃やしてしまえ」と言うんですよ。そこで奥崎さんが誤解してくれたから、殺人の場面を撮ることはできなかつ

ていたわけではありません。ところが奥崎さんは犯罪へと走つていき、僕らもなぜ奥崎さんはこんなふうに犯罪に向かって進んでいくのか、驚きながら撮影していたのです。通りのものが出来上がったことは未だかつてないという意味では、私も原さんと同じです。「ボウリング・フォール・コロンバイン」



対談はルーア監督の故障ミシガフンで行われた

なりません。私の怒りは私個人にとつて
ルーア 怒りにについては反論しなければ

映画では常に政治より 芸術を優先

どう感じてるんだろう。
です。そのことについては、マイケルは
カメラを向けるという操作を私はやるん
カメラを向けながら同時に自分の内側へ
問いを下ろしていくという行為、つまり

問いを下ろしていくという行為、つまり
カメラを向けながら同時に自分の内側へ
カメラを向けるという操作を私はやるん
です。そのことについては、マイケルは
どう感じてるんだろう。
映画では常に政治より
芸術を優先

た。その後二度と奥崎さんは私に向かっ
て「殺しの場面を撮れ」とは言わなかつ
たんです。そして私たちの知らないこと
ろで、映画の撮影がだいたい終わつたと
ころで実際にかつての上旨の自宅を訪ね
て、奥崎さんに出息さんを撃つてしまつた。
もし奥崎さんに2度目に「撮れ」と言
われたら、俺は撮つただらうか、撮らな
かつただらうか。実際に奥崎さんがその
犯罪行為をする場に立つたとき俺はどう
したんだろうか。その答えを出すチヤンス
を、私は永遠に失つてしまつた。マイケ
ルが同じ立場ならどう思うと思う？ 撮
つたと思う？

マイケル 私の映画の対象は許可するかし
ないか聞いてこないですからね(笑)。勝
手に50万人のイラク人とか3千人のアメ
リカ兵を殺しに行つちやいますから。で
も狂気をどう定義するかは面白い問題で
すね。というのも、私たちが暮らしてい
る世界がまさにそういう状況にあります
から。ただ(奥崎さんのように)一人の個
人がそういうことをしたら怖く感じます。
質問にお答えするならば、私はそのよ
うなことをしています。原さんは怒りが私を支え
ているようなことをおっしゃいましたが、
私は自分を支えているのは別のものだと
願っています。それは、人間の根本は善
であり、私たちは異なる点よりも共通す
る点の方が多いという楽観的かつ希望的
信念です。そして暗い時代にはユーモア
のセンスが怒りや絶望によつて自分の魂
が崩壊するのを防ぐために非常に重要な
役割を果たすと信じています。

笑のところが有害なものなんじゃないかと
疑っています。原さんは怒りが私を支え
ているようなことをおっしゃいましたが、
私は自分を支えているのは別のものだと
願っています。それは、人間の根本は善
であり、私たちは異なる点よりも共通す
る点の方が多いという楽観的かつ希望的
信念です。そして暗い時代にはユーモア
のセンスが怒りや絶望によつて自分の魂
が崩壊するのを防ぐために非常に重要な
役割を果たすと信じています。
私の政治的方針については、かなり明
確に提示しているもので、どういった方針
を持っているかは誰が見てもはっきりし
ていることだと思えます。だけど私の持
っているのが政治的方針だけだとしたら、
つまり私が政治的に何かを達成できさえ
すればいいと考えているんだとしたら、
政治的に何かを組織しているはずで
選挙に出馬するとか。
だけど映画の作り手としては、何より
も芸術性を持つて自分を表現するために
映画を制作しているんです。そして常に
政治より芸術を優先させています。何故

原 一本の作品を作つていくにはお金も
要りますが、自分を支えていくエネルギー
も絶対に必要です。マイケルはかつて
インタビュエーカ本の中で、そのエネルギ
ーの中に怒りがあると書いていた。それ
はとても分かるんです。
だけどその自分の怒り、自分のエネル
ギーを支えるプログラムのようなものは、も
しかしたら自分でもよく分らないこと
ろへ行つてしまふんじゃないかという恐
れ、自分自身の中の未知の部分に対して、
それを知りたいという要求が私の場合と
ても強いですね。映画やドキュメンタ
ーリを作るときに、正義のため、あるい
は民衆がどういう要求を持つていて、だ
からその民衆の要求を組織して一つのテ
ーマに収斂させるというような、そん
な話の作り方ももちろんある。けれども、
もう一つ、なぜ自分はこのテーマに関わ
つて、こだわつて作らなければならな
いかという、自分の内なる所へ深く深く

自分の内側へと カメラを向ける

かという、映画の場合政治を優先させ
てしまつたら、普通は誰も見たくないよ
うな出来の悪い作品しか生まれな
うんですよ。要するに映画を作つてい
るということに敬意を持たなければなら
ないんです。観客はわざわざ家を出て映画
館まで足を運び、お金を払い、ベビシ
ツターを雇つたりしながら暗闇の中で見
知らぬ人と一緒に座つて作品を観る時間
をつくるわけですから。私がいとも最初に考
えるのはそのことです。私自身が暗闇の
中で客席に座つて私の作つているこの作
品、このシーン、このショットを見たい
と思うだろうかと、ということ。
それから私は今、ただの映画の作り手
と違うだろうか、ということ。
立場にある。つまり、作品を観るときに誰
が監督なのかあらかじめ目瞭然なわけ
で、必然的にこの「私」というものに自意
識過剰にならざるを得ないんです。それ
がストーリーや観客にどう影響するの
か、そこに付随するものは何か、観客はど
んなことを予想しながらやって来るのか。
例えば公開予定の新作「シッコ」に関

だと思えますから。そしてそれは私たちが何者であるのか、ということと深い関係があると思うんです。

そして、その問いが以前よりどんどん大きくなっていきますよね。私か考えているより大きな観点と、私が声を大にして言いたいこととがつながるものですか。だから医療保険制度を取り上げるというのは乗り物に過ぎなくて、それに乗っつてより大きな問題に近づきたいわけですから。

原一男「自分は誰だ、俺たちは何者なんだ」という問いを持っていて、マイケルの映画を観ていると、その問いを、目に見えるシステムだけでなくて、私なら私、あなたならあなた、心の内側にそのシステムを支えている心の無意識の世界とつながりがある。心内側にある矛盾を——矛盾だけじゃないけれども——またいろいろの問題をあぶり出し、目に見えるようにしてい

私的な問いから 大きな問いへ

するいろいろな記事を読むと「これじゃあ観客は実際に作品を見たときに不満を感じらんじやないか」と思ってしまうんですよ。何故かという、実際の映画はそこに書かれているような作品じゃないからです。ただ、映画好きの一人としていえば、私はだからこそ映画を観に行くのが大好きなんです。映画を観て驚いたり、ショックを受けたり、ある種の感動を覚えたりすることが楽しみなわけです。だから観客が映画を観に来る時に「医療保健制度の映画か。ふーん、まあ大体の内容は見当がつくね」なんて思っただけじゃないんです。そういうこともあって私は過去数年間表舞台に出ませんでした。作品についても公開間近までほとんど言及しませんでした。

く。それも、ドキュメンタリーのとても大きな仕事のはずなんですね。

マイケル・ムーア対策の ホットライン

原一男、マイケルはこんなに有名な人になっでいて、撮影する時に不自由じやないのかね。

ムーア「不自由です。だから今回の新作ではひげを剃って、帽子を脱いで、メガネも外して、25ポンドくらいの体重も減らしましたし、次の作品までもっと減らすつもりです。だけど今回の作品ではひげを剃って帽子とメガネを取っただけで半分ぐらいの確率で私だと気づかれなかつたですよ。

今回の作品の場合、製薬会社や健康保険会社の方でマイケル・ムーアにどう対応すればいいかのトレーニングセッションがあったりしたんですよ。不満を持つている雇用者が社内にくさんいたものだから、私にそういう内部資料などを送ってくれました。マイザーにはマイケル・ムーア・ホットラインが開設

られています、というシンクがあります。これはとても私的でプライベートなシンク（マイケルとは）まったく違った自分自身に選んだ自分自身のこと、そして表面的なテーマと同時刻に自分の内に向かってどだけ本質的で根源的なテーマを探っていくかというところが、この両方の方があってドキュメンタリーは成立する、そういう方法なんです。内容は見当がつくね」なんて思っただけじゃないんです。そういうこともあって私は過去数年間表舞台に出ませんでした。作品についても公開間近までほとんど言及しませんでした。

原一男「私は映画との関係の中で、『ロジャー・&ミ』でも、最初の問いは「どうしてGMは工場を閉鎖してしまうのか。このままここにいた方がいいんじゃないか」というものだった。ただそれを追っているうちに突き当たったのがもつと大きな問い、つまり「不当かつ不平等で非民主的な経済システムを持ちながら、どうしてこれが民主主義社会なんだと叫ぶのか」というものでした。

そして新作「シッコ」ですが、これは医療保険制度に関するドキュメンタリーということになりました。ただ私がこの問いかけようとしていたのはもつと大きな問題で、「私たちは誰なんだ。アメリカ人である我々は一体何者なんだ」ということなんです。私には分かりません。どうして先進工業国の中で私たちの国だけ全国民を対象とした無料の医療保険制度がないのか。これをただ報道するだけではないんですが、私はカメラを持ってその理由を突きとめる方がよっぽど面白いと思うわけです。そこには理由があるはず

とここで原さんは自分の映画について、他の人が気に入るかが何だろうが、自分が芸術作品として満足できればそれでいいと思いますか。

原一男「経済でも何でもいろんな面で、自分が幸せだとは一生思えないだろうと思うんです。つまり、いつも自分が心のどこかに欠陥、つまり病気の部分、マッドネスの部分を持っていて。そういうことで誰よりも一番、自分で分かっている、自分が幸せになるって言葉が、もう全然リアリティがないんですよ。だから一生かけてこの自分のマッドネスな部分とかクレイジーな部分を、自分で掘り下げていく。そして、どこまで作業ができたかについてをマイケルを通して、世の中に出していきたいのです。

